

(書評)

宗内敦著

『エッセイで読み解く 教育・指導のエッセンス』書肆彩光

松井洋子

(東京福祉大学)

先日、都留文科大学の早野慎吾氏から「面白い本がある」と手渡されたのが本書である。どのようなものかと読んでみたが、なるほど面白い。エッセイでわかりやすいかと言えば、そうでもない。専門用語が多く使われている。それでは、専門書かと言えば、そうでもない。エピソードを織り交ぜ、小説のように読み手を取り込む。本書は読み物風エッセイから専門的論考まで多種多様な文章 26 編、親、教師、カウンセラー、教育、指導者の道に真摯に取り組む人々を真正かつ神聖なる専門職へといざなう。

本書は全 255 ページで、目次は以下のようになっている。

序 章 教育・指導の原点—優しさと厳しさと

第一章 教育の主役は親・教師

第二章 学校、教師の問題点

第三章 閑話休題・教育時評

第四章 適応・不適応の心理

終章 教育・しつけ・指導における副作用—過ぎたるは及ばざるが如し

著者は、およそ教育・指導関係なるものは、優しさと厳しさが要の両輪であり、この両輪に支えられていると冒頭で説く。しつけ論で使われる単なる「飴と鞭(甘い面と厳しい面)」ではない。「優しさと厳しさ」である。この考えが本書全般にわたって展開していく。そもそも「教育とは何か」。今も昔もこれからも永遠に語られる「テーマ」である。我々を取り巻く環境も人々の考え方も時代とともに大きく変化し、様々な出来事に暫し、呆然とすることがある。

本書では、多くの事例を通して微妙な内容が発達と適応につながることを論じているが、これは、昨今の教育現場における教育、指導のはがゆさ、もどかしさを乗り越えようと日々葛藤している人々の背中を押してくれるものである。そして何よりも随所に著者の教育に対する熱い「思い」「心」と人としての「信」「真」を感じさせる。その思いこそが教育に必要な根源であると気づかせる。

私自身、日本語教育の現場に身を置き、多種多様な文化背景を持つ留学生を対象に「日本語」習得の指導に日々悪戦苦闘しているといっても過言ではない。言語習得という目標は一見分かりやすく、指導も容易なように思えるが、現実には厳しい。それは留学生たちの異なった国籍・言語・習慣が加わり、言語習得のみならず、生活習慣、日本社会への対応、

そしてその過程における彼らの心の葛藤が第二言語としての日本語習得の理解にも影響を与え、さらに複雑にしているからである。

そのような思いの中で手にしたこの書であるが、心理臨床事例とともに紹介されたエッセイが、ことばでははっきり伝えきれない私自身の微妙な迷いや自信の喪失感に、日々の指導現場での出来事をもう一度振り返ることに気づかせてくれた。私は、「教える」という上から下へとといった目線ではなく、「SHARE する、分かち合う」という基本的な姿勢で当初から学生たちに向きあってきた。教育現場において、教授法などの技術的な指導力はもちろん大切であるが、それ以上に指導にあたる側の人としての心の持ちよう、あり方が問われているような気がしてならない。本書でも、著者は指導者の資質の向上が求められているとしている。つまり指導力の向上である。指導力とは指導者としての社会的認知はもちろんであるが、それ以上に人として「信」「真」、つまり、「信頼」「真剣さ」を備えることにより、指導される側との心のつながりが大切であることを、著者は、臨床心理学の立場から述べている。

著者は、最後に教育現場において指導する側も指導される側も、ほどほどにフラストレーションを感じる中で、互いに葛藤しつつ、忍耐力を養いながら、自ら問題を解決し、自己実現を図らせることにより、己の道を見つけていくものであると述べている。これは対象が日本人であろうと外国人であろうと、一人の「人間」として指導者側に身を置くものとして大した「教育の哲学」など不要であるとであると締めくくっているが、同感できる考え方である。

本書の終わりに当たって「過ぎたるは及ばざるが如し」と著者は述べている。通常の枠を超えた発想で、独自のであり、新鮮である。苦難(著者の言う茨の道)を乗り越えるために是非傍に置きたい書である。

著者である宗内氏は、2006年3月に明星大学を定年退職されてから現在に至るまで、精力的に著書を発行されている。頭の下がる思いである。著者が自らのホームページで本書の解説を掲載しているが、最後にその文章を引用する。

いかなる領域であれ、およそ教育・指導関係なるものは、優しさと厳しさが要(かなめ)の両輪。この両輪に支えられ、子どもを乗せて車は走る。しかし、道は必ずしも平坦ではありません。凸凹道もあれば泥沼道もある。どう走るかは、まさに運転者次第です。時には運転を誤って事故を起こし、子どもに大けがをさせ、命を落とさせてしまうことさえある。教育とは、指導とは、そういう茨の道なのです。本書は、多様なエッセイ・論考を取り混ぜて編まれた、いわば教育・指導の副読本。茨の道を乗り越えるためのエッセンスが読み解けます。

(平成30年2月18日受理)

Atsushi Muneuchi :

Understanding the Essence of Education and Guidance through Selected Essays

Reviewed by Yoko Matsui